

# 幼児期における歌唱発声

## — 日本語の歌 —

伏 見 強

### 1. はじめに

音楽教育を目指す筆者の学生の一人から、声楽レッスンで筆者が求める発声法について、根源的な質問を受けた。それは、毎週個人レッスンで行っているbel canto唱法（イタリアから興った発声法で直訳すると美しい歌声ということになり、声楽家の理想的な発声法とされている）などを習得することへの素朴な問いかけであった。

彼女の質問にじっくり耳を傾けてみると、「日本語の歌を歌う時、ベル・カント唱法は理想的な発声法でありうるのか」そして、「自らが教師として教壇に立った時、小中学生を前にして、ベル・カント唱法を理想的な発声法として教えるべきなのか。もっと、日本語に相応しい発声法がありはしないか」と言うのである。

筆者は今まで音楽学科で教鞭をとり、声楽のレッスンでは当然のこととして、ドイツ・リートにおける表現豊かなドイツ的発声法に軸足を置きながら、ベル・カント唱法にも留意しつつ指導してきたので、他の多くの声楽教師と同様に、この種の考え方は直面する課題からの逃避であり、取るに足らない内容としてきた。しかし近年、新たに担当を始めた福祉学科や幼児教育学科での授業科目などを通してこの問題と向き合ってみると、日本語の歌とそれに相応しい発声法についての研究は、避けては通れない重要なテーマであると言わざるをえない。

日本人として日本語の歌を美しく歌いたいとの願いから、歌唱における日本語の響きを観てみる時、問題点の一つとして、幼児期の発声が非音楽的に扱われている傾向を指摘しなければならない。大きな声で元気良く歌うことを良とし、その結果美しく感情豊に表現することが軽んじられ、力み過ぎた地声が放置されているようで気になるところである。一生懸命になればなるほどむきになり、必死に歌っている子どもの姿に出くわすことはそう稀ではなく、この現象に対して日本の指導者は驚くほど寛容であった。そればかりか、大きな声を評価するこの傾向は、日本人の潜在意識として組み込まれてしまっているのか、音楽系大学の声楽専攻生から、コーラスなどを楽しむアマチュア、さらには一般の愛好家に至るまで共通しているのである。

そこで、前述の学生が抱いた素朴な疑問を契機に、筆者が担当する音楽学科における「声楽」と幼児教育学科や福祉学科での音楽関連の授業科目を総合的な基盤として、「幼児の成長と音楽」さらには「幼児期における歌唱発声」について検証することにした。

## 2. 音楽のある暮らしー幼児の成長と音楽ー


平成14年度・本学幼児教育講座（7月23日、本学演奏ホールにて実施）において、「音楽のある暮らしー幼児の成長と音楽ー」と題し、マイクロソフト社のパワーポイントで作成したスライドを中心にピアノやVTR、CD等のAV機器を活用しながら講座の1コマを担当した。本講習では20枚のスライドを作成し、それに沿って話を進めたが、ここでは参加者に配布したレジュメを元に講習を再現する。

- (1) テーマ（下記のスライドは、当日の2枚目のスライドとして使用したものである。）

### 音楽のある暮らしー幼児の成長と音楽ー

音楽は、乳幼児の成長・発達に重要な役割を果たしています。一方、最近癒しの音楽や音楽療法という言葉をよく耳にするようになりました。日常生活を心豊かにし、潤いのある毎日をご過ごしたいとの願いは万人に共通しており、音楽のある暮らしがそれを実現してくれることは間違いありません。

そこで、こどもの未来を展望しながら、幼児の音楽とその活用方法について、一緒に考え歌ってみませんか？



- a) 暮らしの中に意識して音楽を取り入れているか？
- b) 現代は意識の有無に関らず巷に音楽が溢れている。（例：映画、TV、商業地域、テーマパーク、等々ほとんどすべてのTPOにおいて）
- c) 映画館とテレビを比較すると、映像の大きさや音楽の迫力にも差がある。（まるでサッカーや野球のグラウンド観戦とテレビ中継の差）
- d) 音楽は乳幼児の成長・発達に重要な役割を果たしている。
- e) 「癒しの音楽や音楽療法」をよく耳にするようになった。
- f) 日本の音楽療法草分けの一人櫻林仁氏とジュリエット・アルヴァン女史の来日<sup>1)</sup>について
- g) 日常生活を心豊かにし、潤いのある毎日をご過ごしたいとの願いは万人に共通している。
- h) 「音楽のある暮らし」がそれを実現してくれる？！
- i) こどもの未来を展望しながら、幼児音楽とその活用方法について一緒に考え、歌って欲しい。

(2) 音楽への興味と関心、感受性・感動

- a) 感受性は生まれながらにして持っており、感動することによって一生忘れられないものとなる。
  - b) 「好きこそものの上手なれ」の喩の通り、興味や関心が重要。
  - c) 感動、興味、関心はいつどこでだれに湧き起こるか不明。個人差が大きいので、保育者や教育者はいつでもその芽を摘まないよう、絶えず心掛けていなければならぬ。
  - d) 但し、構えて備えるのではなく、さりげなく「柳に風のごとし」というのが良いのでは。
  - e) 日本の情操教育やピアノ教育への反省点について
  - f) 専門家への基礎としての位置付けで幼児音楽（ピアノ）を考えるのは問題。
  - g) 楽しみながら音楽することが前提。
  - h) 「三かく」運動：汗をかく、恥をかく、ものを書く。
  - i) 「カキクケコ」運動：（カ）感動、（キ）興味、（ク）工夫、（ケ）健康、（コ）恋。
- h) と i) は、NHKラジオで「大脳生理学者・大石先生（ゴリラ博士と自らおっしゃっていた）の豊かに年をとるための提唱」を拝聴し感銘を受けたので、氏の「三かく」運動と「カキクケコ」運動を引用した。これらは人間にとって心身と頭脳の鍛錬が不可欠であり、その前提となるmotivationの大切さについても言及されたものであるが、音楽では特に感動・興味・工夫が重要であると考えられる。

(3) 比較音楽学 Vergleichende Musikwissenschafts<sup>2)</sup>

音楽の分野での幼児期についての記述を探していくと、比較音楽学に行き着く。

- a) Vergleichende Musikwissenschafts
- b) 幼児の生長の観察などを通じた身近な比較研究
- c) 幼児の生長と音楽的衝動・Freude am Klang<sup>3)</sup>

(4) 左脳と右脳<sup>4)</sup>・音楽療法とEvidence

- a) 左脳は読み書きなどの思考を司り、論理的。
- b) 右脳は感性・情感などの芸術的領域を司り、情緒的。
- c) 日本語の擬音（ざあざあ、しとしと、ぶかぶか、どぶん、どぶり、どんぶらこ等々）
- d) 左脳と右脳の機能分担にも日本人と欧米人との間に差<sup>5)</sup>。
- e) 音楽を不可解と感じる人は左脳偏重の人？音楽は心で聴く、感じるもの。
- f) 現代生活では音楽が氾濫し、その結果、音楽の大切さや重要性に気付かず、聞こえていることすら実感できない場合もある。
- g) 高齢者施設や子どもの難病（脳性障害等）施設等で音楽療法が盛んになってきたが、一方でEvidence（証拠、確かな根拠に基づく療法）が問題。
- h) マスキング効果：歯科医、ホテルロビー、生産性向上を狙った工場等
- i) 購買意欲を掻き立てる効果：デパート、スーパー、量販店等

(5) 右脳を使って！

ピアノを一曲、「千と千尋」から「ふたたび」<sup>6)</sup>を演奏した。

(6) 旋律と和声

音楽は旋律、和声、音程、拍子、リズム、調、音色、強弱、テンポなどの要素に分析できるが、幼児音楽に携わる保育者にとって特に重要なものは、旋律と和声つまり、「伴奏付け」ということになりはしないか。そこで「やさしく学べる音楽理論」<sup>7)</sup>P106～P107の例を引用し、ピアノを弾きながら5パターンについて解説した。

(7) 国歌

サッカーの世界カップに極東地域が熱くなったのはついこの前のことであるが、そこではいろいろな国々の国歌を聴くことができた。これらの国歌は夫々の国における国民性や民族性、歴史、さらには民族間の音や音楽に対する感じ方、発声法・響きの嗜好なども教えてくれた。

(8) ヨーロッパの子どもの音楽

ウィーン少年合唱団の（ウェルナーの「野ばら」）とギーゼキングのピアノで（モーツァルトの「ああ、お母さん、あなたに申しませう」による12の変奏曲ハ長調K.265）をCDで聴いて、ヨーロッパの力みのない、柔かく澄んだ響きを確認しながら、世界のこどもの発声法について概観し、ヨーロッパとりわけウィーンが世界の音楽をリードし続けた理由を探った。

ドイツの子どもの歌「Hopp, hopp, hopp」<sup>8)</sup>を、最初はドイツ語の歌詞の読み方を練習し、続いて歌詞を訳しながら解説、最後に歌唱指導を行った。この曲は日本風に言えばわらべ歌であるが、ヨーロッパ音楽の古典的手法で作曲されており、単純な伴奏の中にも、歌詞の持つ情景と同時に子どもらしい心配りが盛り込まれている。

Hopp, hopp, hopp

ジャンプ ジャンプ ジャンプ

Text : Carl Hahn

作詞 : カール ハーン

Melodie : Carl Gottlieb Hering

作曲 : カール ゴットリーブヘリング

Übersetzer : Tyuyoshi Fushimi

対訳 : 伏見 強

Hopp, hopp, hopp,

ジャンプ ジャンプ ジャンプ

Pferdchen lauf Galopp !

子馬がパカパカ駈けていく

Über Stock und über Steine,

切り株も石も越えて

Aber brich dir nicht die Beine.

でも、脚を折らないでね

Hopp, hopp, hopp, hopp, hopp,

ジャンプ ジャンプ ジャンプ ジャンプ ジャンプ

Pferdchen lauf Galopp !

子馬がパカパカ駈けていく

出典はDelphin VerlagのUnsere schönsten Volksliederであるが、本書には「子どもの歌」「愛の歌」「旅のうた」「飲んで踊る歌」「バラード・大道芸人の歌」「スケルツォ風な歌」「兵士・水夫の歌」「狩の歌」「夕べの歌」などに分類された合計114曲のVolkslieder（民謡）が、ドイツ風でメルヒェンの世界を想わせるイラストと共に収録されている。

#### (9) 発音・発声のメカニズム

- a) 発音・共鳴・発声のメカニズムについて（音叉や楽器などを使用）
- b) 管弦打楽器と声などの音色について
- c) 遊びと音楽の接点から楽器作り遊びを提案。

草笛作り

空缶や竹筒などとあずきや大豆や石ころなどの組み合わせ

貝殻、石、木などの使用

口笛、瓶、ストローなどを吹く 等々

#### (10) 歌いましょう

アニメーション映画「千と千尋の神隠し」から「いつも何度でも」<sup>9)</sup>、「NHKおかあさんといっしょ」から「あ・い・う・え・おにぎり」<sup>10)</sup>、「あかりをともしよう」<sup>11)</sup>の3曲を取り上げ、歌唱指導をした。

「いつも何度でも」は明らかに旋律が先に作られ、後から歌詞が当てはめられていて、音楽のアクセントと歌詞の語頭が一致しないので、歌い方に工夫が必要となる。こうした注意の必要な曲はポップス系や他の大衆音楽には数多く見られ、無頓着な歌い方に出会うと辟易させられるが、本講習を、このような事柄の指摘の好機と考え、目的に合った教材としてこの曲を採用し、歌詞とメロディの関係を理解した正しい歌い方について解説しながら指導した。

具体的に言うと、この曲は4分の3拍子で書かれており、音楽の自然なアクセントは各小節の1拍目にくるのだが、歌詞の語頭が持つ自然なアクセントは別の箇所があり、一致しない場合が多い。

音楽のアクセントを囲み文字で、歌詞の語頭が持つ自然なアクセントをアンダーラインでそれぞれ示してみると、「よんでいるむねのどこかおくで・・・」のようになり、音楽の自然なアクセントを優先させると意味が通らなくなる可能性がある。こうした場合、歌い手は歌詞の語頭のアクセントを優先させ、音楽のアクセントを楽しみながら歌うと、内容を正しく伝えながら、しかも音楽を崩すことなく歌える。このことを課題として歌唱指導した。

以下に、アンダーラインで歌詞の語頭が持つ自然なアクセントの位置を、囲み文字で音楽のアクセントの位置を、夫々示すと、歌詞が割当てられた100小節（100個の音楽上のアクセント）中、アクセントが一致したのはわずかに16個のみと極端に少ないことが分かる。

いつも何度でも

作詞／覚 和歌子 作曲／木村 弓

よんでいるむねのどこかおくで  
いつもこころおどるゆめをみたい  
かなしみはかぞえきれないけれど  
そのむこうできつとあなたにあえる

よんでいるむねのどこかおくで  
いつもなんどでもゆめをえがこう  
かなしみのかずをいいつくすより  
おなじくちびるでそおつとうたおう

くりかえすあやまちのそのたび  
ひとはただあおいそらのあおさをしる  
はてしなくみちはつづいてみえるけれど  
このりようてはひかりをいだける

とじていくおもいでのそのなかに  
いつもわすれたくないささやきをきく  
こなごなにくだかれたかがみのうえにも  
あたらしいけしきがうつされる

さよならのときのしずかなむね  
ゼロになるからだがみみをすませる  
いきているふしぎしんでいくふしぎ  
はなもかぜもまちもみんなおなじ

はじまりのあさのしずかなまど  
ゼロになるからだみたされてゆけ  
うみのかなたにはもうさがさない  
かかやくものはいつもここに  
わたしのなかにみつけられたから

ラララルル (省略)

ラララルル (省略)

「あ・い・う・え・おにぎり」は4分の4拍子で作曲されていて、歌詞の語頭のアクセントと音楽のアクセントが見事に一致し、43個の音楽上のアクセント（便宜上、強拍部分のみでカウントし、中強拍部分は省略した）中、言葉のアクセントが来ない場所はわずかに6ヶ所のみであった。

幼児音楽ではこの曲のようにシンプルに作られている場合が多く、単純明快な印象を与えるが、中には「いつも何度でも」のような複雑な構成になっている曲も存在する。「あかりをともそう」はそうした例の一つであるが、ここでは説明が重複するので、例示することを省略する。

「あ・い・う・え・おにぎり」と、「あかりをともそう」はどちらも幼児のために作曲された曲であるが、後者には作曲技法上、多くの工夫が見られ、その分、複雑な心理的内面の表現がなされていて演奏は容易ではない。しかし本講習会には保育士や幼稚園教諭の方々が多数参加されていたので、彼らが、現場で応用することを視野に入れ、コードネームでの伴奏付けや曲想を正確に表現し得る発声法にも言及しつつ、ビデオ<sup>12)</sup>も活用しながら、効果的な演奏を目指した。

あ・い・う・え・おにぎり  
作詞・作曲／しゅう さえこ

あさからいっしょにおにぎり  
うちじゅうえがおでおにぎり  
こころもかからだもホツカホカに↓なる  
あいうえおにぎり、あいうえおにぎり  
あいうえおにぎり、きょうのおにぎりのなかみは？

\*\*\*\*

\*↓\*\*\*\*に↓きめた！

まつしろふつくらちよつびりしおあじ  
ギユツとにぎったそのかたちたまらない

あいうえおにぎり、あいうえおにぎり  
あいうえおにぎり、きょうのおにぎりのなかみは？

○○○○

○↓○○○に↓きめた！

あいうえおにぎり、あいうえおにぎり  
あいうえおにぎり、あいうえおにぎり

#### (11) 幼児音楽とその活用方法

- 将来、音楽のある暮らしに結びつく音楽の実践のためには、良い音（豊かで柔かい音・美しい響き）と音楽の心が伝わる表現が不可欠である。
- 運動や視覚と結びつけると効果的である。
- 指導者のピアノは上手いほど良いが絶対ではない。
- 写真にも芸術写真からブリクラまでであるように、音楽にもクラシックから大衆音楽まで、多種多様である。将来の暮らしの中で息づく音楽を目指して、いろいろな可能性を秘めた幼児と一緒に、様々な幼児音楽と向かい合って欲しいものであることを切望する。

本講座では、幼児期における音楽に対する感受性や感動・興味・関心から入り、旋律と和声を保育者としてどのように処理するか、さらには、日本と欧州系諸国間の音響に対する認識の差や左右脳の役割分担の相違についても説いた。そして、ウィーン少年合唱団のハーモニーなどを通して、ヨーロッパ音

楽の響きの美しさを実感してもらった。また、発音・発声のメカニズムを解説し、遊びの中に簡易楽器の製作などを取り入れてみてはどうかとの提案も盛り込み、後半は「千と千尋の神隠し」から「いつも何度でも」を、「NHKおかあさんといっしょ」で歌われる「あ・い・う・え・おにぎり」と「あかりをともしよう」を取り上げ、歌詞（日本語）と音楽との関連について言及しながら、幼児音楽においても重視されるべき音楽性豊かな表現を求めて歌唱指導を実施した。

### 3. 日本語発声の特徴

声楽家にとって常識である原語での歌唱は、当然のことながら、一般の人々には理解されない場合が多い。さりとて、西洋音楽導入の黎明期に見られたように、如何に工夫された訳を当てはめてみても、原曲が持つ感動やニュアンスは伝わってこない。このことは音楽と言語が密接に結びついていて表裏一体の関係にあることを裏づけており、洋の東西を問わない。

さらに、響きにおいても言語間に大きな相違が見られ、日本語の発声と外国語（特にヨーロッパ系：イタリア語、フランス語、ドイツ語など）の発声の違いは顕著である。声楽発声ではイタリアを中心にベル・カント唱法が確立されたが、これは音声学的にみても、非常に合理的であり、芸術的表現の幅を広げ、ドラマティックな表現をも可能にしたので、すぐに世界的な広がりを見せた。この発声法は声楽的表現の追求の結果確立されたものではあるが、同時にイタリア語が本来的に持っている響きの中に、このベル・カントの要素が含まれており、同様にフランス語やドイツ語など欧州系の他の言語にも共通している。つまり、これらの言語は本質的に豊かな響きを持っていて、ごく自然な流れの中でベル・カント唱法へと発展していった。言い換えれば、欧州系の言語を話す人々は、総じて日常的に、発声に関するすべての器官を合理的に使いながら話す結果、ベル・カントに到達したのである。

数年前のことになるが、日本ゲート協会主催の「ゲート生誕の夕べ」で、着任間もない在日ドイツ総領事の挨拶を拝聴したが、マイクの必要を感じさせない肉声の演説が、会場いっぱい実には朗々と響き渡っていた。それに引換え日本人の司会者や通訳者の声が、いかにも乏しく愕然とさせられてしまった記憶が蘇る。

通常、日本人の標準的な発声はヨーロッパ諸国のそれに比して響きが貧弱である。日本語の発声メカニズムは口腔や咽頭をあまり広げず、上気道を中心とした発声法が一般的であり、この結果、通常の日本語の響きは浅く扁平で豊かな広がりを感じさせない。「以心伝心」や「腹芸」などという言葉に象徴されるように、自分の意思を明確に語ろうとしない日本民族の慣習は、声の色にまで反映しているのだろうか。いずれにしても、これは日本語の持つ響きの個性であり、仮に外国人のような広がりのある響きで日本語をしゃべると、その響きの快さよりも、気取った感じが強く、かえって気持ち悪ささえ覚えてしまう。

普段から発声器官のフル活用を習慣としていない多くの日本人は、人前で歌ったり話したりする際に、響きの無い日本語の響きと格闘する結果、必然的にいわゆる「頑張り過ぎる状態」になり、一言で言うと、喉に負担のかかった発声法に陥り易い。

そもそも日本では、伝統的に演歌や浪曲、民謡等々でしばしば見られる、押しつぶしたような声や必要以上に頑張った声に対し寛容で、むしろそれは美とされ、歓迎される傾向にすらある。



それゆえに、日本人が日本語の歌を歌う時には、歌唱にはどちらかと言うとハンディがあるとされる日本語のこの特性と日本人の発声上の慣習を認識し、他の言語にも増して豊かな響きの合理的な発声を心掛けねばならない。特に幼児期の発声に、問題が多く現れる傾向にあるので、幼児教育に携わる関係者には、より一層注意深い対応が求められる。

#### 4. わらべ歌

文化財保護の観点にも似た考え方、つまり、放置すれば伝承する人々がいなくなり、このままでは近い将来、文化遺産ともいえる「わらべ歌」が消滅してしまいかねないかという恐れも手伝ってか、近年、わらべ歌の蒐集が盛んに行われ、下記の一覧表の通り、柳原書店は1979年から1992年の14年間に渡って「日本わらべ歌全集」<sup>13)</sup>を都道府県別に刊行した。

「日本わらべ歌全集」発刊年次別都道府県一覧表

1979	東京都	京都府			
1980	大阪府	鹿児島・沖縄県			
1981	秋田・山形県	埼玉・神奈川県	愛知県	長野・岐阜県	徳島・高知県
1982	佐賀・長崎県	熊本・宮崎県	愛媛・香川県		
1983	奈良県	静岡・山梨県			
1984	青森県	新潟県	島根県	広島県	千葉県
1985	岩手県	鳥取県	岡山県	北海道	
1986	滋賀県	石川県	宮城県		
1987	群馬県	大分県	兵庫県		
1988	富山県	福井県	福岡県		
1989	茨城県				
1990	栃木県				
1991	和歌山県	福島県			
1992	山口県	三重県			

一方、これより先1969年に小泉文夫は論文「わらべうたはどのようにして育ってきたか」<sup>14)</sup>を「音楽教育研究」に発表し、その中で「ドイツ、フランス、アメリカなどの学校唱歌は、音楽性の上から伝統的なわらべうたと異質なものではない。だから、子どもたちは特にそれらと別個の伝統を保持する必要がない。ところが日本の子どもは、伝統的わらべうたとまったく異質の、長調、短調の歌、三拍子のリズム、強弱の拍節などを学校で習う。テレビやラジオもそればかり、つまり西洋音楽かその亜流であるため、それらを模倣し、身につけて幅広い音楽感覚を吸収はするが、もっとも肝心な人間性（子どもの場合は子どもらしさ）に直接結びついた遊び歌の音楽性を発展させてくれるものがない。だから、単純で覚えやすく、歌うことに何の努力もいらない伝統的五音音階の数珠つなぎのようなりズムの歌を遊びの必需品として確保するのだ。」<sup>15)</sup>と解き、子どもたちの遊びの中で今も生み出し続けられている

ことを論証した上で、「わらべうたの創造や誕生に関して、もっとも重要なことはどんなに新しい歌でも、まったく新しいといえるものはほとんどないということである。」<sup>16)</sup>と述べている。

小泉のこの論によれば、いつの時代にも子どもたちはわらべうたを創造し、伝染（伝承）させていくので、わらべうたが消滅する恐れはない。ただ、遊びは時代や社会環境の変遷と密接な関係にあり、それに伴って採用される遊びの内容やその時使われる言葉もどんどん変わっていく運命にある。ゆえに、わらべうた伝承の全国的な運動は、文化遺産としての遊び歌の保存という意味で重要であると言えなくもない。

しかし、小泉の指摘から33年が経過しようとする今日、さらに子どもたちの生活環境は大きく変化し、彼が言うように子どもの遊びが存在する限り、わらべうたは消滅することはないにしても、西洋音楽かその亜流の音楽を模倣させられ続け、すっかり身につけてしまった幅広い音楽感覚吸収の結果、伝統的  
五音音階が色褪せてしまった感のあることも否定できない。

「わらべうたに関する発声」について論ずることは、小泉流に言うところ、歌うことには何の努力も要しないわらべうたであるから、語るも愚かということか。

## 5. 合唱音楽における言葉の処理

関西合唱連盟は平成14年8月3～4日、「第45回関西合唱連盟コーラスキャンペーン高野山」を開催したが、筆者は今年の担当県を代表して、本企画の任に当たり、関西在住の講師陣を年齢構成および得意分野を考慮して配置し、バラエティに富んだ講習プログラムを準備した。

第1日目が高嶋昌二氏による「メロディ」（玉置浩二作曲）、西岡茂樹氏による「地球へのバラード」（三善晃作曲）、そして松浦周吉氏による「ハイリヒ・ミサ」（ハイドン作曲）で、2日目は清原浩斗氏による「リンゴ追分け」（米山正夫作曲・えのきだゆみこ編曲）「愛燦々」（小椋佳作曲・信長貴富編曲）、伊東恵司氏による「O Magnum Mysterium」（ブスト作曲）、須賀敬一氏による「確かなものを」（高田三郎作曲）であった。

彼らはアマチュアを対象にした、豊富な現場の指導経験から、ややもすると抽象的になり易い発声法の指導も実に巧みな言葉使いとジェスチャーとで具現化していたのが印象的である。

例えば、高校や大学のグリーで実績のある高嶋は玉置浩二の「メロディ」を取り上げ、「お菓子作り時の卵の泡たて動作」や「窓ガラスに息を吐く様子」「踏み切り板を使用した跳躍」などを、ユーモアいっぱいのジェスチャーと共に引用し、曲の表情に合った発声法をイメージさせ、また、「一万人の第九」などのイベント合唱団の指導に実績を持つ清原は、美空ひばりの「リンゴ追分け」「愛燦々」を取り上げ、ひばり流演歌発声法の特徴をクローズアップし、力み方と脱力した発声を、身振り手振りを交えて解説しながら指導した。

若手のホープ西岡と伊東は、三善晃の「地球へのバラード」、ブストの「O Magnum Mysterium」を夫々取り上げ、西岡は日本語と音楽の密接な関係を強く意識して作曲された三善作品を完全に昇華して指導し、伊東も現代合唱曲中もっとも人気のあるブストの作品を、和声構成を解説しながらその魅力に迫った。

大御所の一人松浦はハイドンの「ハイリヒ・ミサ」を取り上げ、古典音楽の重厚な響きを堪能させ、

高田作品の第一人者を自他共に認める須賀は、合唱曲としてはもはや古典的な印象さえ覚える高田三郎の「確かなものを」を取り上げ、詩の持つ内容の表現方法について熟っぽく指導していた。

これら6人の講師たちが共通して語った音楽作りのポイントは、大きな声や立派な声（もちろん豊かな響きに裏づけされた発声は前提であるのだが）の要求ではなく、むしろ各々が取り上げた曲の曲想や詩の内容に相応しい音楽の心の表現として、言語と声をどのように扱うかという点にあった。

言葉のイントネーションと音楽が持つアクセントやリズムの調和的な処理、声色、ダイナミック等々、音楽表現の根源には演奏者の心の揺れがあり、この心の揺れこそがすべての芸術活動の原動力となり、その時々発声法をも決定する。このことは心の機微を捉え、繊細さとダイナミックな表現が綾を成すドイツリート歌唱法にも相通ずるところがあり、同時に、ジャンルを超えたすべての音楽表現のもっとも基本的で重要なポイントである。

## 6. おわりに

一口に歌と言っても、芸術表現を目的とした声楽から、演歌やポップスといった大衆音楽、さらには学校で取り扱う音楽やいわゆる唱歌、わらべ歌に至るまで、音楽表現の形態や表現内容は多種多様である。その音楽が持つ必然性が表現を決定するのだから、すべての音楽に共通する発声法など存在する筈がなく、ベル・カント唱法が世界的で如何に芸術表現に適しているとは言っても決して万能ではない。しかも、音楽が求める感動を表現し得る技術として、発声法が位置付けられねばならないとするならば、いろんな発声法が許容され、試されてしかるべきであろう。

しかし、幼児期においてはあらゆる可能性に順応できる表現の基礎を身につける重要な時期であるだけに、慎重であらねばならず、発声器官の合理的な活用によってもたらされる、自然で無理がなく表情豊かな響きの柔らかい声を生む理想的な発声を心掛けねばならない。

ベル・カント唱法での歌声はアクロバティックな感動さえ覚えさせてくれるものの、日本の歌を歌う時には必ずしも適切とは言いがたく、むしろそれは邪魔にさえなり得る場合もある。時に日本語が持つ響きとベル・カントのそれは相容れないものがあり、絵画における水彩画と油絵の差に似ていると言うことができるかもしれない。この日本語の特徴を踏まえて、言葉と意味や求められる詩の適切な表現を崩すことなく、豊かで柔らかい響きの得られる発声が、もっとも適切な日本語の歌の発声法ということであり、それは全身の力を合理的に使った時にはじめて可能になるので、全身の力を合理的に使うという点では何らベル・カント唱法と変わりはないのだが、日本語の発声には、より繊細さが求められると言うことができるのではないか。

他方、発声は本人が気付くと気付かないに関らず習慣的要素が強く、それはまるで文字に現れる「癖」のようで、年を重ねるにつれて矯正は困難さを増し、いろんな音楽が求める種々の発声法に即座に適應することは次第に至難の業となっていく。また、発声器官から生ずる声とそれを知覚する聴覚器官が、どちらも体内の近い位置に内在するだけに、声の響きの良し悪しを客観的に知覚することは、訓練を積んだ人でも困難であるとされるので、特に幼児や初心者には、聴いていて心地良く、歌っている本人にとっても負担が少ない発声こそが、良い声であると判断することを勧めたい。

## 文献

- 1) Alvin, J. : Music Therapy. John Baker Publishers Ltd., London, 1966 (櫻林仁、貫行子：音楽療法. 音楽之友社、東京、210～211、1997.)
- 2) 属啓成：音楽の歴史. 音楽之友社、東京、15、1986.
- 3) 属啓成：音楽の歴史. 音楽之友社、東京、16、1986.
- 4) 小松明、佐々木久夫：音楽療法最前線. 人間と歴史社、東京、58～66、1998.
- 5) 小泉文夫：音楽の根源にあるもの. 平凡社、東京、228、1999
- 6) 張替滋夫：やさしいピアノ・ピース47 千と千尋の神隠し. ヤマハミュージックメディア、東京、12～13、2001.
- 7) 桶谷弘美、熊谷新次郎、杉江正美、高橋悦枝：やさしく学べる音楽理論. 音楽之友社、東京、106～107、2001.
- 8) Unsere schönsten Volkslieder. Delphin Verlag, München und Zürich, 23、1979
- 9) 張替滋夫：やさしいピアノ・ピース47 千と千尋の神隠し. ヤマハミュージックメディア、東京、2～4、2001.
- 10) NHKのおかあさんといっしょ4月号. 講談社、東京、39、2002
- 11) NHKのおかあさんといっしょ4月号. 講談社、東京、35、2002
- 12) NHKビデオNHKおかあさんといっしょ最新ソングブックあさごはんマーチ.  
NHKソフトウェア、東京、2002
- 13) 日本わらべ歌全集. 柳原書店、京都・東京、1979～1992年
- 14) 小泉文夫：音楽の根源にあるもの. 平凡社、東京、364、1999.
- 15) 小泉文夫：音楽の根源にあるもの. 平凡社、東京、95、1999.
- 16) 小泉文夫：音楽の根源にあるもの. 平凡社、東京、98、1999.